

パーキンソン病における認知症の発症に関連する因子の検討

研究分担者 望月秀樹 大阪大学大学院医学系研究科神経内科学教授

研究要旨

パーキンソン病における認知症の発症に関連する因子をパーキンソン病類縁疾患の臨床調査個人票を用いて検討した。振戦は他の運動症状と異なり重症である方が認知機能障害の発症との関連がより少ないことが示された。振戦が起こる病態生理が他のパーキンソン症状とは異なることが支持される一方で振戦は認知機能障害の進展への関与がより少ないことが示唆された。非運動症状については精神症状と認知機能障害の発症との関連が示唆された。定位脳手術を施行された患者において認知機能障害の発症との関連が示唆された。

A.研究目的

パーキンソン病患者における非運動症状が注目されており、その中でも認知機能障害は社会生活の大きな阻害因子となり得る。その予測因子を明らかにすることは、進行期の患者における必要な医療や社会資源を考える上で有用である。我々はこれまでパーキンソン病患者における認知機能障害に注目し、平成 28 年度の本班会議では、過去の臨床調査個人票を用いて臨床重症度の増悪、L-dopa の使用と認知症発症との関連が強いことを発表した。今回、さらに認知機能障害を予測できる臨床的特徴を明らかにするため新たに臨床調査個人票の検討を行った。

B.研究方法

(倫理面への配慮)

2010～2014 年度のパーキンソン病類縁疾患の臨床調査個人票（更新分）よりパーキンソン病患者（Hoehn & Yahr の臨床重症度分類 3～5 度）128885 例を抽出し、パーキンソン病で、かつ初回入力で「痴呆症状なし」の項目に入力がなされた症例を対象とし、元々認知症を認めない患者における認知症（痴呆症状）の出現との臨床項目（振戦、指タツプ、筋強剛、椅子からの立ち上がり、歩行、姿勢、姿勢の安定性、幻覚、排尿困難、失禁、陰萎、失神・眼前暗黒感、日

内変動、精神症状、定位脳手術）の関連について検討した。解析方法はアウトカムを「認知症あり（痴呆症状あり）」とした時の Kaplan-Meier 曲線を作成し、時間依存性 Cox 回帰分析を行った。

C.研究結果

対象患者を図 1 に示す。

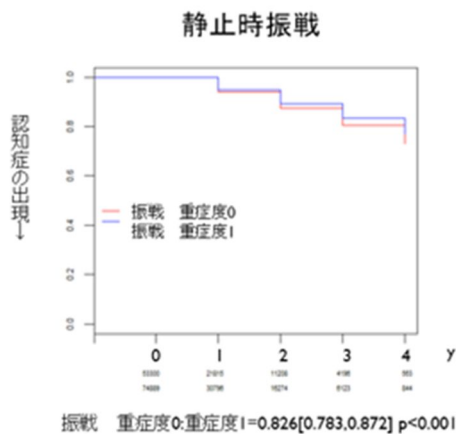
(図 1)



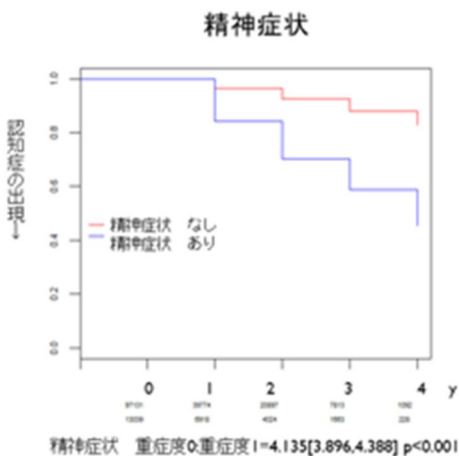
振戦を除いた、指タツプ、筋強剛、椅子からの立ち上がり、歩行、姿勢、姿勢の安定性、日内変動、ジスキネジア症状などの運動症状については、中等度以上の症状を有する患者は、有しない患者と比べ、認知症発症との関連が強いことが示された。一方、振戦に関しては、中等度以上の症状を有する患者の方が、有しない患者と比べ、認知症発症との関連が低かった。(図 2) 非運動症状では、精神症状を有する患者、幻覚、排尿困難、失禁、失神・眼前暗黒感、陰萎を有しない患者の方が、認知症発症との関連が強いことが示された(図 3)。また、定位脳手術

を行った患者は、未施行の患者に比べ、認知症発症との関連が強い結果であった（図4）

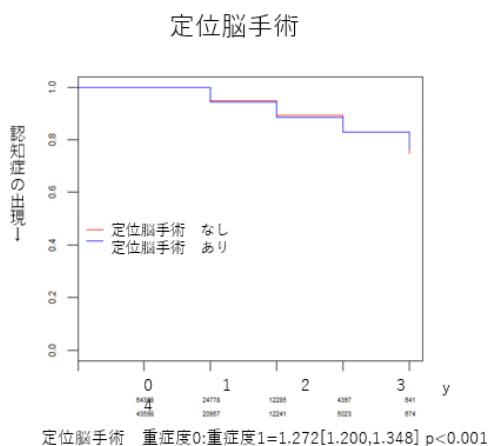
（図2）



（図3）



（図4）



D. 考察

大規模調査にてパーキンソン病において振戦

は他の運動症状と異なり重症である方が認知機能障害の発症との関連がより少ないことが示された。振戦が起こる病態生理が他のパーキンソン症状とは異なることが支持される一方で振戦は認知機能障害の進展への関与がより少ないことが示唆された。

非運動症状については精神症状と認知機能障害の発症との関連が示唆された。

定位脳手術を施行された患者において認知機能障害の発症との関連が示唆された。

E. 結論

大規模調査にて後方視的にパーキンソン病における振戦は認知機能障害の進展への関与がより少ないことが示唆された。精神症状、定位脳手術とパーキンソン病における認知症発症との関連が示唆された。

F. 健康危険情報

報告事項なし
（分担研究報告書には記入せずに、総括研究報告書にまとめて記入）

G. 研究発表

1. 該当なし
2. 学会発表
第61回日本神経学会一般演題発表予定

H. 知的財産権の出願・登録状況

特になし

G. 研究発表

（発表雑誌名巻号・頁・発行年なども記入）

1. 論文発表 なし
2. 学会発表 第61回日本神経学会総会一般演題発表予定

H. 知的所有権の取得状況（予定を含む）

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし